



唐船城築城800年 ～有田氏の居城～



唐船城跡

平成30年（2018）は町内の山谷区にある唐船城が築城されてから800年という節目を迎えます。築城に関しては諸説ありますが、一応、建保年間（1213～1219）ということで、いずれにしても800年の月日が経過しようとしています。

そもそもこの唐船城とは一体、何なのでしょう。中世の松浦地方に現れた武士団「松浦党」は源氏の流れをくみ、11世紀ごろより海上活動を得意とする武士団として知られていました。松浦党のはじまりは、延久元年（1069）、肥前国松浦郡今福（現在の松浦市）に、都からきた源久という人物からといわれています。久の子どもには直、持、聞などがいて、直の子どもには清、披、圃、榮、遊などがいます。かれらは自分たちが住んでいる場所の地名を名前につけて名乗るようになり、その中でも榮が有田氏の祖となったといわれており、その有田氏が築いた城が唐船城です。

唐船城は時期によっては他の城主を兼務し、領主が常駐していなかった時期もあったようです。その間、周辺の支配者との戦を繰り返し、城主の子・幸松丸母子が他の領主から誘拐され、その後、家臣によって奪回したことや、あるいは皆様よくご存知の「お才観音」



城と館（想像図）

『海と交流 わたしたちのふるさと』から

にまつわる話など、多くのドラマを秘めた城跡でもあります。

その後、松浦党は戦国時代の終わりごろになると、平戸の松浦氏が現在の北松浦地方を支配するようになり、伊万里市や西松浦郡の地域は佐賀を本拠とする龍造寺氏の支配下に入っていきます。

それまで松浦党が支配した地域には伊万里城や梶谷城、飯盛城などおよそ40か所の城跡があるとされ、これらの城は山の頂上や尾根など、自然の地形を利用した所に築かれています。しかし、現在、石垣や土塁、空堀跡などが残っている所もありますが、そのほとんどが地上の建物は存在しません。

この地方の歴史を記した『三星鑑』（椎谷孟保著）には（館報No.69、No.100参照）、大正9年（1920）に建立された「唐船城址之記」の碑文が紹介されており、松浦党の祖源久の嫡男直の第三子榮がこの有田郷を開発し、その地名から有田氏を名乗ったこと、龍造寺氏から鍋島氏に支配が移り、有田氏も佐賀に移ったので城は廃止されてわずかにその礎石が残っていることなどが記されています。

最後の領主・有田盛（あるいはとも）の娘は龍造寺信周（あるいは・隆信弟）の次男の内室となって有田家を継ぎ、2人の男子の内、嫡子は長崎で戦死。次男が母方の里・大村に転出し、以来大村藩の家老として活躍し松浦家として現在まで続いているということです。

このように、有田町には国見山麓に縄文時代の遺跡が点在し、中世にも多くの人々がここで暮していたことがこれらの史跡からうかがい知ることができます。この唐船城築城800年の節目にあたり、どのように顕彰していくかについては、町民の皆様と協議を重ね、実り多いものになればと思います。（尾崎 葉子）

皿 季刊 山

No.113

春
2017

有田町歴史民俗資料館・館報

幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其一

陶器商 手塚 亀之助

(天保12年・1841～明治33年・1900)

平成30年という年は「町史の行間」でも紹介した唐船城築城800年と共に、明治維新から数えて150年でもあります。この日本にとっての大変換期に、有田でも多くの先人たちが活躍し、今の礎を築いています。それは有田焼の業界もそうですし、教育、政治、芸術などあらゆる分野で忘れてはならない人々がいます。これらの人々が残した功績をこれからシリーズで紹介していきたいと思えます。トップバッターは大樽の商人であった手塚亀之助です。(文中敬称略)

【生い立ち】

手塚亀之助は天保12年（1841）11月20日生まれですから、明治元年（1868）当時は26歳。焼き物を携えて京阪地方を駆け巡って有田焼をいかにして発展させようかと苦心し、妻ための従弟であった深海墨之助と「不二社」を起こしたといわれますが、この「不二社」の実態がどのようなものだったか詳細はよくわかりません。明治3年（1870）の香蘭社資料には大樽町の商人16人の内の一人として名前が記載されています。

父清三郎は弘化4年（1847）、亀之助6歳のころに亡くなり、38歳で寡婦となった母たかは味噌屋を生業として亀之助を育てました。



手塚亀之助家旧宅（大樽）

【合本組織・香蘭社の誕生】

成長した亀之助は有田焼の商人として活躍します。明治7年（1874）、上京中に岩倉全権大使らと共に米欧各国を視察してきた太政官少書記・久米邦武（元佐賀藩士）より海外諸国の陶磁器の現状を聞き、さらに同9年に米国フィラデルフィアで万国博覧会が開催されることを知ると、内務省勸業寮に出向いてその詳細を聞き取り、そのことを有田にいた八代深川栄左衛門、深海墨之助、辻勝蔵らに伝えました。久米から合資会社の必要性を説かれた亀之助は深川らに西洋各国の事例を引き合いに出しながら会社を興すことを熱心に伝えました。その結果、誕生したのが合本組織香蘭社です。製造部門を深川・深海・辻の各家が担当し、亀之助は商いを担いました。現存しているこの当時の製品に蘭のマークと深川、深海、辻の名が入っているのは製造場所が異なっていたことによります。また、従来、辻家が禁裏御用をつとめていたことから、この香蘭社がそれを引き継ぎました。

【いざ、アメリカ・フィラデルフィア万博へ】

その後、内務省勸業寮に出仕していた納富介次郎が有田に招き、万博出品作の製造に着手しました。また、博覧会の趣旨説明のために博覧会事務官の塩田真・石原豊貫も有田に招いています。

同年3月、亀之助は社員の深海墨之助・深川卯三郎、通訳の元佐賀藩士・江副廉造と共に米国へ出港しました。会期は5月10日から同年11月10日までの159日間で観覧者は1016万5千人と記録されています。会場となった場所は現在フェアモント記念公園となっていて、往時を偲ぶことができます。

参加した起立工商会社（社長は佐賀出身の松尾儀助）の社員西尾喜三郎はその時の思い出を書き残していますが、日本を出発してサンフランシスコ港に到着後、貨車に乗り込み、フィラデルフィアまで8日間ほどかかったこと、今日のように食堂車はなく、大きな駅で下車して20分から30分で食事をするのが何より楽しみだったことや、博覧会会場近くにコーラムという日本人が経営する旅館に泊まって会場まで通ったことなど、恐らく有田からの渡航者も同じ経験をしたことだと思います。また、留守を預かった深川栄左衛門はたびたび米国滞在中の社員に送った書簡で、眼病を患っていた亀之助の体調を気遣っています（その後、明治26年、52歳の時に完全に失明）。

また、出品者の往復旅費は官費で対応し、その他滞在中の宿代や食費などの雑費は一切自費で賄うようにという指示があり、服装も「西洋形ノ衣服ヲ用ユベシ」とし、「寝衣ノ外日本服ハ不可用事」とあります。残念ながら有田を代表して参加した彼等を撮影した写真

は残っていませんが、副總裁の海軍中將・西郷従道や勸業寮雇のワグネルなど28人の関係者の集合写真(『海外博覧會本邦參同史料 第二輯』)を見ると、きっと亀之助等もネクタイ・背広姿で会場内を闊歩していたことは容易に想像できます。



フィラデルフィア万博参加者集合写真
『米國博覧會報告書』より

【精磁会社の誕生】

同10年11月20日、明治政府の初代内務卿大久保利通は、香蘭社の各人に対し、「名誉之章」を贈っています。フィラデルフィア万博に引き続き、同年夏から秋にかけて東京・上野公園で第1回内国勸業博覧會が開催され、そこにも出品した香蘭社の製品がひとときわ光彩を放ったことがこの「名誉之章」となったのでしよう。しかしながら、このころから経営に関する意見の相違を埋めることが叶わず、同12年、深川が独自で香蘭社を經營することとなり、他のメンバーは精磁会社を設立しました。社長は亀之助がつとめ、社員に深海墨之助・竹治兄弟、辻勝蔵と明治6年のウィーン万博に参加した経験がある川原忠次郎が加わりました。

同13年にはアメリカ・ボストンの陶器商人アーサー・フレンチを有田に招き、洋食器の製造に関して指導を受け、170種類の輸出用見本を製作しました。この時、亀之助の長男で後に森村組のニューヨーク支店長をつとめた国一がフレンチのお世話係をつとめました。この経験が後に同19年の渡米につながったものと思います。これらの製品は東京に開設された延遼館、鹿鳴館などの食器としても買い上げられました。しかしながら、精磁会社は同19年に墨之助が、22年には川原忠次郎が相次いで死去し、30年ごろには完全に經營を終えたものと思われる。



精磁会社謹製の色絵草花文変形皿 (館蔵)

【終焉とその後】

明治33年(1900)3月4日、亀之助は死去しました。行年59歳。幕末から明治にかけて、移動手段もままならない中、さらに世情不安定の中にあつて有田焼を国内はもとより世界に向けて販売を試みた亀之助でした。現在も盛んに言われているのは「顧客のニーズ」。150年ほど前にも同じ使命、目的のために東奔西走した亀之助の人生でした。それらの製品は今も海外の美術館などに所蔵され、往時の有田焼を偲ぶことができますし、長男国一は明治31年アメリカ人女性ドラ・メミと結婚し、その子孫は今もアメリカでその思いを受け継ぎ、次男栄四郎や三男米一の子孫もまた各界で活躍され、亀之助の思いは絶えることなく今につながっています。



三空庵墓地にある手塚亀之助・ため夫妻墓碑

【参考資料】

- ・百田家文書(有田町歴史民俗資料館蔵)
- ・「有田町史 陶業編Ⅰ、Ⅱ」
- ・「West Meets East ~China and Japan at the Centennial Exhibition」 Philadelphia Museum of Art
- ・「米國博覧會報告書 (フィラデルフィア萬國博覧會報告書)」
- ・「證書」 香蘭社蔵
- ・「出品目録」 香蘭社蔵
- ・「自叙傳」 手塚栄四郎著
- ・「幻の明治伊万里 悲劇の精磁会社」 蒲地孝典著
- ・「世紀の祭典 万国博覧會の美術」 東京国立博物館他編
- ・「図説 万国博覧會史 1851-1942」 吉田光邦編
- ・「明治有田 超絶の美」 鈴田由紀夫監修
- ・「納富介次郎と四つの工芸・工業学校」 佐賀県立美術館・高岡市美術館編
- ・「香蘭社130年史」 香蘭社史編纂委員会編
- ・「明治初期日本の原風景と謎の少年写真家」 アルフレッド・モーザー著
- ・「ふでばこ33号 万国博覧會 佐野常民と有田焼」など



町屋で昔話を聞く会 開催しました

平成29年2月18日(土)、恒例となった表記の会を有田町公民館と共催で開催しました。会場は新装なった佐賀県重要文化財の有田異人館で、話者は1回目から担当していただいているボランティア団体「ひこうせん」の三人の皆さんに今回もお願いしました。会場を異人館にしたので、まずは童謡「赤い靴」を皆で歌いました。でも、今の子どもたちはあまり知らないようで、異人さんが何なのかから説明をお願いしました。

参加した22人の子ども達は初めて聞くお話に興味深そうに聞き入っていました。お話が終わったあとは、異人館の1階、2階を見学し、この建物の歴史や本当に異人さんが来たのかなどというお話をしました。

異人館は、来る4月から正式に開館する予定です。詳細は当館のHPなどでお知らせします。



作家森まゆみさん来有!

このほど、作家の森まゆみさん一行が有田町にお越しになりましたので、泉山磁石場や町並みをご案内しました。その経緯を説明しますと、現在、有田町の内山地区で町並み保存事業の発端となったのが昭和54年(1979)に、日本ナショナルトラスト(当時は財団法人観光資源保護財団)から支援を受けて始まった「有田古窯跡群と町並」調査(会長岡崎敬九州大学教授・当時)でした。そのナショナルトラストの職員としてたびたび有田を訪れた多兒さんが森さんたちと一緒に活動を続けてこられており、今回、多兒さんも一緒に久しぶりの有田を見ていただきました。

前日には福岡県八女市で「正岡子規」について講演会をなさった森さんですが、宿舎が町並みの中の一棟丸ごとということでお仲間の総勢7人で東京からお越しになり、八女市や秋月、佐賀県の鹿島市浜地区、嬉野市塩田地区の町並み等を見学したあと、有田にもお越しいただきました。

トンバイ塀のある裏通りを案内していたら辻精磁社の建物に興味を持たれ、突然ではありましたが15代

辻常陸さんをお願いして中を見せていただきました。2時間余の滞在時間でしたので急ぎ足での案内になってしまい、次回の有田再訪を約束して有田町をあとにされました。



第63回文化財防火デーを 実施しました

昭和24年1月26日、修復中の奈良・法隆寺金堂から出火した火災によって、金堂内の壁画の大半を焼損してしまいました。この世界的な文化遺産が被災したことで、この日を「文化財防火デー」と定め、文化財を火災・震災その他の災害から守るため、全国的な防火運動が展開されています。

有田町でも1月29日(日)に、明治～大正頃に築窯された応法の猪子谷単室窯跡(町史跡)で訓練を実施しました。伊万里・有田消防本部の消防車や、地区の消防団による消火放水訓練を行い、訓練に参加していただいた関係者や近隣の方には消火器を使用した消火訓練を体験していただきました。

災害が起こらないことが何よりですが、万が一発生した場合でも落ち着いて対処できるように、また文化財を次の世代に伝えていくための訓練でもあります。



季刊『皿山』

通巻 113号 (平成29年3月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>